〈動向〉

外国にルーツを持つ子どもたちの悩み — 自宅放火と自殺そして名前調査から思うこと —

辻本 久夫

2010年は気になるというより、起こってはならない「事件」が続いた。一つ目は、7月9日の宝塚の中学3年のブラジル人女生徒が自宅を放火して家族に死傷を与えた事件。二つ目は8月31日掲載の自殺した神戸のインド人大学生の遺族が弁護士会に人権救済を訴えた事件。(学生は2007年6月に自殺し、その1年後に病氣療養中の父親も大学に真相明を訴え、後追い自殺)。三つ目は、10月23日の群馬県桐生のフィリピン人の母を持つ小学6年生女児の首つり自殺である。

「宝塚」は、事件発生から家庭裁判所による少年院送致決定ができる8月下旬までの1ヵ月半ほぼ毎日、どこかの新聞に関連記事が出ていた。集めると、ノート3冊にもなった。概要は次のようになる。幼児期に母親と来日し、その後ずっと日本で暮らすブラジル国籍の中学生女子15歳が日本人の友人と一緒に、母親、義父そして妹の一家全員を殺害しようとして、深夜自宅に放火した。その結果、母親は焼死し、残る二人も重傷を負った。

「桐生」は、名古屋から転校後の授業参観にフィリピン人である母親が出席して以後、複数生徒からいじめを受けるようになった。両親は学校側と10回以上にわたり相談したが具体的な解決策の提示はないため、転居して別地域の中学校に入学することを考えていた矢先の自殺であった。

これらのニュースから、私がすぐに思い出したのが、1985年7月6日の西宮の在日コリアン3世の高校2年生¹文剛(ムンガン)と、79年9月9日の埼玉県上福岡の在日コリアン3世の中学1年の²林賢一(イムヒョンイル)の自殺。それと2006年2月の滋賀県長浜市で幼稚園送迎当番の中国人母親がグループ登園中に自分の子どもと一緒に車に乗っていた5歳児2人を殺害した事件である。「西宮」と「上福岡」はともに20年以上前の在日コリアンの子どもの自殺事件で、「長浜」はまだ5年も経たない「ニューカマー」母親の殺人事件である。これらは悲しすぎる出来事として私の脳裏にこびりついている。そのため大学の講義でもよく取り上げる。

-
- 1 文剛に関しては、『兵庫の在日朝鮮人生徒にかかわる教育と運動Ⅲ—文剛君追悼—』(兵庫県在日朝鮮人教育を考える会編、1990年)がある。
 - 2 林賢一に関しては、『ぼく、もう我慢できないよ—ある「いじめられっ子」の自殺』(講談社文庫、金賛汀著)、『ぼくもう我慢できないよ ある『いじめられっ子』の自殺』(金賛汀、一光社、1980年)『続ぼくもう我慢できないよ 『いじめられっ子』の自殺・その後』(金賛汀、一光社、1980年)『先生はなぜ見殺しにしたのか』(金賛汀、情報センター出版局、1981年)などがある。

「上福岡」は新聞、テレビ放送等で大きくとりあげられた。概要は次のようである。中学校入学直後、少年はクラスメートと喧嘩になり複数の相手に組み伏せられていたが、相手の腕を噛んだためクラスメートや担任からは少年が悪いと認識される。6月中旬いじめを苦しめた遺書を書き残したが、自殺を実行できず帰宅する。担任はいじめをした生徒を注意するが、その後少年は「自殺野郎」などと呼ばれ、いじめは更にエスカレートし、毎日のように暴行を受け、二学期が始まっても集団暴行が続き、そして、朝、マンションの中庭に飛び降り自殺した。

「西宮」も大きく新聞で取り上げられ、1か月以上も投書が続いた。彼は中学・高校時代に生徒会執行部に属して友人たちから慕われ、また幼児期より柔道の練習に励むスポーツ少年であったが、他の多くの在日コリアンの子どもと同じように、日本名で生活し「在日」であることを語らずに生活していた。彼は学校と自宅が見える郊外の小高い山で、夏目漱石の『こころ』と日頃持ち歩かない自分の外国人登録証を足元に置き、黒帯で首つり自殺を行った。遺書がなく、自殺の動機は今も不明のままであるが、「在日」である自分への憤りや学校への不満などが推測される。

2人が自殺した時代は、1974年の日立就職差別裁判での勝利。公営住宅・児童手当等の国籍要件撤廃運動の高まり。初の韓国籍司法修習生の誕生(77年)。難民条約発効(82年)に伴う「特例永住」新設による国民年金等の国籍要件の撤廃。そしてNHKハンゲル講座が始まり、全国的に外国人登録証の指紋押捺拒否運動が活発化する(84年)など日本での在日外国人の人権が改善されていく時代でもあった。

70年代以降、日本社会は経済のグローバル化に伴い、大きく変動し、人の多国籍化が進んでいる。外国人登録者数は2009年末に少し減ったが、日本経済が不況の中にあるにもかかわらず、毎年過去最高を更新してきた。約58人に1人が外国人となり、国籍別では中国が韓国朝鮮籍を追い抜き首位となった。法務省は長期的には在住外国人はまだ増える傾向にあると分析する。

また、「長浜」や「桐生」のような日本人と外国人との国際結婚も1989年に2万件を突破して以来年々増加し、2008年は概ね「20組に1組」となった(兵庫県は約25組に1組、神戸市は約18組に1組)。日本人男性が外国人女性を妻にするケースが急増している。外国人妻は、かつてはそのほとんどが韓国朝鮮で「在日」女性だったが、92年以降はフィリピン人、97年以降は中国人が最多となった。この国際結婚の増加に伴い、「父母のうち一方が外国人」の子ども(ダブル)の出生数も増えた。2008年では「45人に1人」である(兵庫県は「46人に1人」、神戸市は「34人に1人」)。この子どもの多くは現行国籍法で「日本国籍」となるので、外国人登録者数には含まれず、統計上見えない存在だが、国際結婚が増加する1987年から2008年まで21年間のダブルの子どもは概算で333万人を超える。「桐生」の子どももその一人である。

一方、文部科学省も、在住する義務教育の対象年齢の外国人の子どもが近年増加傾向にあること、日本語学習の必要な子どもたちも年々増えていることを発表している。そして、高等学校への編入学希望者も急増している。

私はこの2年、³兵庫県在日外国人教育研究協議会で「調査研究・教育相談室」を担当している。そのため、外国人の子どもたちは日本語が出来ても

3 通常、略して、「県外教」と呼んでいる。1995年12月に設立準備会を結成し、1997年3月発足する。初代会長は、前関学総合政策学部長の故安保則夫。情報誌『ともに』を年5回発行し、外国にルーツを持つ子どもに関する事業や教育活動、研究等を実施している。

いじめや、からかいからストレスがたまったり、悩んだりしていること、また多くの子どもたちは心配をかけたくないと親にしゃべらないことなどもよく聞く。また私は、芦屋浜地域での日本語教室⁴「こくさいひろば芦屋」に関わっていることから同様のことを聞くことがよくある。昨年夏の小中学生を対象にした「夏休み集中学習会」で1人のブラジル人男子中学生が学校でからかわれたことをしゃべると、ペルーやブラジルの小学生や、親の離婚で初めてイギリスから来日した男子中学生もたまっていたようにしゃべった。その場に居合わせたブラジル人の母親はそれらを聞いて日本の学校に通わず不安を持っていたがこんなにあるのかと驚く半面、子どもたちが言い合ったことに安心もした。また、母親がペルー人の男子中学生は母親のことを、フィリピン人の母親をもつ小学生女兒は毎年のフィリピンへの帰省を友だちに絶対しゃべらないという。この女兒は6年生のとき「ひろば」で初めて「フィリピンのおばあちゃん」の作文を書き、みんなに披露したが、学校で読むことを拒否した。このようなダブルの子どもたちの心も「ばれない」ようにいじめ、からかいから防衛している。

そのほかの大きな問題に学校で使用する「名前」がある。神戸市教育委員会調査によると、在日コリアンの子どものうち本名で通学する割合は神戸市でも20%を超え増加した。逆に神戸市内のベトナムの子どもは1996年度と2010年度を比べると91.7%から44.8%と急減した。兵庫県全体では本名で通学する中国の子どもは60%台、日系人のブラジル、ペルーの子どもも概ね60%台という結果が出ている。実に4割近い子どもが本名を使わず、通

名を使っている。びっくりする調査結果である。1980年代後半より親と、また呼び寄せで日本にやってきた「ニューカマー」の子どもたちの4割が、日本風の通名を使っているのである。教育相談のなかで、日本人との再婚で呼び寄せられた子どもの多くが日本名を戸惑いながら使っていることを知った。日本語もほとんどわからない時期から新しい日本名になって、自分が呼ばれていることもわからない、勉強もわからないなどの悩みを持っている。

このように外国にルーツを持つ子どもの悩みの1つは、「桐生」や「上福岡」の子どものように日本人の子どもたちによるいじめやからかいである。

2つ目は、「宝塚」のように来日後数ヶ月で話は少しずつ理解できるようになるが、「学力」（学習言語）がついていないため授業がわからず、また宿題も出来ないため学校へ行かなかったり、学校で荒れたり、授業についていけず高校に入れないことである。この現象は全国の多くの学校で起きている。そのため多住都市では、多様な取り組みが行われている。今回の中学校では約10年前にブラジル人男子が1年生に5名となって「荒れ」が起きている。兵庫県内の「ニューカマー」の子どもたちの高校進学率は低く、大きな課題と指摘されて久しい。

3つ目は、名前である。在日コリアンの子どもの通名（日本名）は、朝鮮半島を植民地にしていた時代の「創氏改名」にさかのぼる。1945年以降は、日本社会の問題として考えず、在日コリアン側の責任として（親や子どもの希望尊重という形で）、学校を含め日本社会全体が責任を逃避してきたと私は思っている。他の外国人の子どもたちも本名

4 「こくさいひろば芦屋」は、「マダン」に参加するペルー人の要望から始まる。2006年4月より設立準備（会場確保等）を始め、10月に誕生する。現在芦屋市立潮見小学校内のコミスク会議室を借用。毎日より午前10時～12時。中高校生のみ夜間教室（週2日）を開催している。登録学習者の国籍は約10カ国、約70人、内高校生以下の子どもは30人。主として芦屋、西宮、尼崎、宝塚、神戸中央区、東灘区等に在住する「ニューカマー」が通っている。

を使うことでいじめられ、からかわれたりする。偏見の目で見られる厳しい現実が学校の中（日本社会の中）に存在するから、日本名を使うことによって日本人の排外的な視線やいじめを避けるために通名を使う。まさに、子どもたちの防衛行動とも言える。しかし、通名を使って生活することは、健全な人格形成ができにくいとこれまで在日コリアンから多く指摘されてきた。

外国人の子どもたちがこのような悩みから解放されるためには、外国にルーツをもつ子どもへの学校での取り組み、地域の学習支援、子どもの出会いや居場所作りなどが大切である。ニューカマーの子ども日本語教育と母語教育、アイデンティティの確保が必要とされる視点は、オールドカマーといわれる3、4世代目である在日コリアンの子どもも同じである。外国人の子どもが多数在籍する尼崎や神戸、姫路の限られた小学校にはベトナム人や中国人の子どもが集まる「教室」が居場所となっている。そこでは母国文化や民族料理づくりなどが行われている。高校では、少なくなりましたが「朝鮮文化研究会（朝文研）」「コリアンサークル（KCC）」等が生徒たちの居場所となっている。

校外では、私が関わる「ひろば」のような外国人の子どもへの学習支援教室が少数ではあるが、姫路や神戸等で住民ボランティアによって開かれている。兵庫県国際交流協会調査では2010年5月現在、「子ども学習支援教室」は17カ所、日本語教室は68ヶ所ある。

私にとって、「西宮」は悲しすぎた。学校世界だけでなく、地域に根付いた「居場所」、「出会いの場」の必要性を強く感じた。その後、私は数人の教員と学習会⁵「芦屋在日外国人セミナー」を開き、また外国人の子どもや親たちが出会える場として

の⁶「ふれあい芦屋マダン」に関わった。最近では、小学校で行われている日本語教室「こくさいひろば芦屋」にも関わるようになった。このように「西宮」は私の生活スタイルを大きく変えた。

今、「こくさいひろば」には「宝塚」や「桐生」「長浜」のような背景を持つ子どもや親が来ている。ある男子は幼児期に母親と来日したが、小学入学時期になっても親は不安が先立ち手続きをせず、2年間家にいたままで3年目にやっと地元小学校へ入った。家庭では日本語はほとんど使っていなかったため日本語学習や教科の勉強に苦労している。時々毎日の生活から逃げ出したい気持ちが起こるといい、中学生2年になった彼は「学力」から高校進学 of 気持ちになれないともいう。「宝塚」の子どもとよく似た家庭環境でもある。また、外国人の母親を持つダブルの子どもたちも多い。先ほど書いたように外国人の母親を友だちに知られたくない気持ちを中高校生になるほど持ってしまうという子どももいる。また学校などで「ハーフ」と言われるのが嫌だという。一方、母親たちは日本語を勉強しているが、子どもが中学生になっても学校のプリントや日本の教育制度が十分わからないと不安を持ち、日本人の夫が出張や夜勤等で不在な時は子どもに聞いてもわからないので困ってしまうという。

2010年夏の8月31日、日本政府の2省府から同時に大きな発表があった。文科省と内閣府である。文科省は「定住外国人の子どもの教育等に関する政策懇談会」の意見をふまえた「政策ポイント進捗状況」5項目の発表である。内容の1つは「入りやすい公立学校を実現するための3つの施策」として日本語指導体制の整備などを掲げている。その他「学校外における学習支援」として公立学校の

5 芦屋在日外国人セミナーは、1986年3月より月1回土曜日の午後開催したが、95年1月の震災後中断したままである。

6 「ふれあい芦屋マダン」は、1991年3月より毎年3月に開催し、2010年3月で20周年となった。当初2回は「芦屋韓国朝鮮文化とのふれあい」で、第3回より現在の名称に変わった。

授業についていけない子どもに補完的な「学習の機会の提供」なども提起している。一方、内閣府は、2009年1月に「定住外国人施策推進室」を設置したあと、2010年8月には日系定住外国人施策推進会議からの「日系定住外国人施策に関する基本指針」を発表した。今後の日本の定住外国人施策の基本的な方針が示されたといえる。内容は、1.日系外国人が置かれている状況と今後の対応、2.施策の基本的な考え方、3.施策の具体的な方向性、4.国として今後取り組むまたは検討する施策に分かれている。

「宝塚」の女子中学生は、学校の勉強もわからず、友達などからも孤立を深めていたと推測する。「桐生」の子どもも「西宮」の高校生も出会いがなかったのではと推測する。「宝塚」の女生徒も「桐生」の女儿も、「長浜」の母も、家庭でも学校・地域でも言葉の壁が立ちふさがり、精神的にも物理的にも傷ついていたと思う。彼女・彼らの居場所がなかったと推測する。それゆえ、このような事件は起こるべくして起こったと思う。

上記の行政施策が活かされ、これらの悲しい事件が2度と起こらないような行政と学校と地域との連携した居場所づくり等多様な取り組みが必要である。